

# 2014年度 大学院奨励研究員研究報告書

研究科委員長印

印

2015年 3月 15日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏 名	雲岡梓	印
-----	-----	---

指導教員

所属・職名	関西学院大学・教授	
氏 名	森田雅也	印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	「江戸の女流文学者、井上通女・荒木田麗女・只野真葛の研究」
採用期間	2013年 4月 1日 ～ 2015年 3月 31日

研究科受付印

教務機構受付印

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

(1) 学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名	雲岡梓	論文題目	「荒木田麗女の紀行文—『初午の日記』・『後午の日記』の道程—」		
	雑誌名	関西学院大学人文学会編、『人文論究』		巻号	発行年月	掲載頁
				第64巻 第1号	2014年4月	25～44頁

雑誌論文	著者名	雲岡梓	論文題目	「『麗女連歌発句評・麗女独吟百韻』について」		
	雑誌名	俳文学会、『連歌俳諧研究』		巻号	発行年月	掲載頁
				第127号	2014年9月	14～27頁

雑誌論文	著者名	雲岡梓	論文題目	「荒木田麗女年譜稿」		
	雑誌名	関西学院大学日本文学会編、『日本文芸研究』		巻号	発行年月	掲載頁
				第66巻 第1号	2014年10月	39～69頁

図書	著者名		論文題目			
	書名			発行年月	頁	
					総頁：	
	担当箇所：					

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

(2) 学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	連歌研究会	開催地	東京・青山学院大学2号館
題目	「『飯盛千句』について」	発表年月日	2014年12月6日

学会名	京都近世小説研究会	開催地	京都・同志社女子大学
題目	「只野真葛と本居宣長」	発表年月日	2015年3月14日

## 研究経過状況（3000字程度）

研究課題「江戸の女流文学者、井上通女・荒木田麗女・只野真葛の研究」の中で、今年度は特に荒木田麗女に関する研究に力を入れた。

まず、紀行文『初午の日記』と『後午の日記』から読み取れる麗女の人的交流の分析を行い、4月には「麗女の人的交流圏—紀行文『初午の日記』・『後午の日記』から—」が『人文論究』に掲載された。この論文では、麗女が上方の漢詩人と親密な交友関係を有していたことを明らかにした。

次いで、麗女の連歌指導者としての側面に注目して、朝日町歴史博物館に所蔵される写本、『麗女連歌発句評・麗女独吟百韻』の研究を行った。その結果をまとめた「『麗女連歌発句評・麗女独吟百韻』について」が、9月に学会誌に掲載された。この論文では、麗女の指導者としての側面に注目した。麗女の連歌指導を記録する書、『麗女連歌発句評・麗女独吟百韻』を分析することで、麗女は古歌や物語等の古典知識と、抱負な連歌知識に基づいて批評を行っていたことを明らかにした。そして、女性連歌師の存在自体稀であった近世期において、麗女が指導的立場を保持することができた理由は、麗女が連歌師に求められる古歌や古典文学に関する豊富な知識を有していたことにあると指摘した。

また、麗女の千句連歌と中世の千句連歌の比較を行い、12月に連歌研究会にて、「『飯盛千句』について」との題目で発表を行った。

こうして得られた成果をもとに、博士学位論文「荒木田麗女の研究」をまとめ、博士（文学）の学位を授与された。

博士学位論文では、麗女が取り組んだ諸文学全般について論じ、その内容と概要を確認した。これまでの麗女研究は物語作者としての側面に偏り、特に代表作である『池の藻屑』、『月の行方』について論じたものが多い。連歌・和学・随筆・紀行文・漢詩といったその他の文学活動については、言及される機会に乏しかった。そこで、博士学位論文では、第1章から連歌・擬古物語・歴史物語・和学・紀行文・漢詩と、麗女が取り組んだ文学活動について、順次論じて行った。

和歌・随筆・絵画等、麗女の文学活動の中で比重が軽かった分野について取り上げることができなかつたという反省点が残るが、麗女の生涯と文学活動の全体像を、おぼろげながらも近世中後期の文学史上に捉えることができたと考えている。

また、荒木田麗女の研究と並行して、井上通女、只野真葛について現地調査を行った。4月29日から30日にかけて宮城県立図書館・仙台市民図書館・仙台文学館・五峰山松音寺を訪れ、真葛に関係する資料を探した。

まず、宮城県立図書館に所蔵される、明治期に宮城県で使用されていた教科書、『修身図鑑』（松柏書房、明治26年12月）の中に、真葛を描いた肖像が存在することを発見した。これによって、真葛の姿が明らかになるとともに、明治期の宮城において、真葛が修身の手本として尊敬されていたことが判明した。

次いで、昭和初期に初めて真葛研究を行った仙台の郷土史家、中山栄子氏旧蔵の真葛資料を多数所蔵する機関、仙台文学館にて真葛資料を閲覧し、学芸室長の赤間亜生氏・学芸員の阿部朋子氏から聞き取り調査を行った。これによって、未だ翻刻や紹介がなされていない真葛の書簡や和歌等を閲覧し、写真撮影することができた。

真葛の墓所の存在する五峰山松音寺では、墓所改装の際に発掘された真葛の副葬品を見学し、写真撮影することができた。副葬品の内容から、真葛死亡時には只野家の経済状況が悪化しつつあったことが判明した。また、墓碑銘の調査を行ったことにより、真葛とその夫の生没年や戒名等を正確に知ることができた。

さらに、真葛の功績について英語で著書を出版し、海外に只野真葛を紹介した上智大学准教授のベティーナ・グラムリヒ＝オカ氏や、歴史学の観点から江戸の女性文学について研究する柴桂子氏と面会して情報の交換を行い、資料提供等の協力を得た。

こうした調査の成果として、2015年3月に京都近世小説研究会にて、「只野真葛と本居宣長」との題目で真葛に関する発表を行った。

そこでは、真葛は滝沢馬琴によって同時代の文人に紹介されたこと、馬琴に筆削を乞うていたことから、馬琴の弟子と見なされることもあるが、真葛の『独考』、『キリシタン考』などの著書を読み解いて行くと、文章表現においても思想の点においても、真葛と馬琴に共通性はなく、むしろ本居宣長からの影響が読み取れることを論じた。

また、2014年6月には井上通女の出身地である丸亀を訪れ、丸亀高校にて開催された井上通女記念講演会・墓参行事に参加した。講演会では、丸亀の郷土史家秋山尚氏に質問する機会を得て、丸亀の女学校で、明治期に通女が「学神」と崇められるに至った経緯に、明治の歌人下田歌子の尽力があったことを教示された。

墓参行事では、通女の菩提寺である法音寺を訪れ、通女の墓石・位牌を見学することができた。これによって、通女とその夫の生没年や戒名等を正確に知ることができた。

こうした調査を通して、井上通女・荒木田麗女・只野真葛について新たな事実を発見することができた。

以 上